学生スクールボランティアの取り組み

キーワード　肢体不自由児の学校生活サポート・障がいのある児童と関わる経験と学び

○取り組んだきっかけ

静岡市教育委員会から「学生スクールボランティア制度」を使い、健康科学部（看護学科・静岡理学療法学科）の学生に、静岡市内の小学校に通う車いす生活を送る児童の学校生活をサポートしてほしいとの依頼があったことがきっかけです。

○活動の目的

車いす生活を送る児童が授業に専念できるようにサポートすることで、児童の学習効果が高まったり、身体的・精神的ストレスが軽減できます。

医療専門職を目指す健康科学部の学生がボランティアとして活動することで、地域に貢献しつつ、障がいのある子どもと関わる経験をし、学びを深めることができます。

○具体的な内容

＜ボランティア登録まで＞

1.健康科学部の教員から、肢体不自由児童と接する際の注意点などのレクチャーを受けます。
2.小学校で面接を受け、許可を得ます。

＜ボランティア登録後＞

1.学生が授業のない時間などを利用し、事前に参加可能な日時を小学校に伝えます。
2.小学校との調整後、決定した日時に対象となる児童の教室に行きます。

＜実際の活動例＞

・教室間の移動補助
・授業での動作補助
　（例）習字道具準備
　　握力を要する作業等
・他の児童の補助
・勉強内容について聞かれた場合の可能な範囲でのアドバイス

＜現在までの活動経緯＞

2022年度に健康科学部看護学科2年生4名が参加し、試行的に活動を開始しました。
2023年度に同学科2年生2名が加わり、現在6名の学生で活動しています。

○期待される効果

私たちは普段の大学生活の中で、児童と関わる機会というものはほとんどありません。そのためこの活動を通して得られることや期待される効果として以下の５点が挙げられます。

（１）「児童との関わりが持てる」という点そのものです。また、健康な児童だけでなく、障がいのある児童との関わりは「小児看護学実習」以外にはほとんど無いため、「障がい児との関わりを持てる」ことも貴重な経験となります。

（２）「障がい児の気持ちに寄り添う」経験ができるということです。例えば、児童に困っている様子があった場合、どのようなサポートが児童にとって良いのか、また、必要としているのか、ということを考え、イメージしながら関わることを心掛けています。児童の気持ちを考えて寄り添う、という大切さを学ぶ機会になります。

（３）似たような疾患や同じ疾患のある人であっても、人それぞれサポートの必要度は異なるため「個別性を考える」という機会を得られることです。

（４）「障がい児とその他の児童との関わりを学べる」という点です。例えば、教室内で机移動を行う際、障がい児の机を他の児童が運んでいる姿がありました。このように、他の児童が障がい児のサポートをどう行なっているのか、どのように関わっているのかを実際に見て学ぶことができます。

（５）車椅子の移動介助や移乗、物を取るなど「サポートの仕方を実践的に学ぶことができる」ということです。

今後もこの活動を継続しながら自分たちの学びにも生かしていきたいと思います。

※写真はすべて大学での練習風景

代表者：成瀬雅子
健康科学部看護学科 2年
指導教員：毛利智果
健康科学部看護学科 講師

連携先
静岡市教育委員会